しんらばんしょう
全面教育学研究会通信
2012. 11.1 No.12

《１０月例会報告》

ホームページ発信

記念すべき
全面研ホームページ
ネットワークの輪を広げましょう

沢柳政太郎研究の目途

庄司和晃

今日の成城学園の基礎を作ったとされる沢柳政太郎について庄司さんが今回熱っぽく語った。

私事だが、かつて大学の卒論のベースとして必要になり信州教育の歴史をたどったことがある。その中に長野県がかつて教育熱心県だと言われた所以の一つとして、大正自由教育運動があった。臼井吉見の小説『安曇野』にその雰囲気を読み取ることができるが、今日のような自由画教育を提唱した画家山本鼎（かなえ）とともに、個性尊重の教育運動家として信州松本藩出身の沢柳政太郎がいた。大正の末期に起きた川井訓導事件（国定教科書を使わないで授業を行ったということで辞職させられた事件）で信州教育は事実上自由教育の幕を閉じてしまったが、その精神は東京の私学、特に成城学園に色濃く残された。その中心がまさに沢柳政太郎なのである。

2004 年に成城学園教育研究所主催で行われた講演会**「沢柳政太郎とその時代」**のあと「成城教育」128 号に寄稿した庄司先生の文章が紹介されたが、そこには「…後輩にとって得がたいもの…」という言葉が見え、沢柳政太郎の後輩を自認する庄司先生の姿が垣間見えた。

文部官僚から京都帝大の総長まで務めた沢柳は、晩年は士官学校の予備校であった成城学園を、全く違った自由な雰囲気の学校にデザインした。ことに小学校教育が学校教育の原点であるとして、今日ある成城学園の基礎を築いたのだ。

小学校教育が学校教育のメルクマールであるという確信は、我々全面研の教員の中にはあるのだが、その原点は、意識こそしていなかったが成城学園の沢柳政太郎から出発したということがいえるのではないだろうか。

当日もう一つ紹介されたのは**「柳田社会科の教科書と仮説実験授業の授業書」**（**庄司和晃　成城学園教育研究所研究年報第８集　昭和６０年１１月**）という論文だ。

柳田国男より年配の沢柳政太郎は、教科書について「教科書を以て筆記の代用をなすもの」と規定した。それを受けて柳田も教科書の内容だけを教えるような学校教育は広い視野を求める教育にならないと教科書無用論を説くのである。両者の教科書観

は内容説明としての教科書の否定である。それを受けて教科書でない教科書をつくったのが板倉聖宣氏の仮説実験授業の授業書であるという。柳田は、後年自ら教科書編纂に手を染めるのであるが、そこには沢柳政太郎の教科書観が反映されているという。本文の一部を６ページの掲載したので読んでいただきたい。

病気の三段階論文作り

庄司 和晃

三段階論文作りは自分なりの‘観’の創出であるが今回は病気編である。サンプルとして看護学校の生徒の作品が紹介されている。前段にナイチンゲールの論文の作り方が紹介されている。この論文は、まず原則なる物をストレートに持ち出すという手法であるという。すなわち$\boxed{3}$→$\boxed{2}$→$\boxed{1}$といういわゆるのぼりおりの「降り」の思考法なのである。この自覚は重要で、本質をつかみやすいという構造を意識的に読み取ることができるだろう。

古代からの病気観は他力本願的だ。つまり自分の手に負えないものであったからだ。ところが看護学校の学生にもその様な発想が多少であるが読み取れる。それは病気に対する畏怖として。

東京新聞の１０月１日の夕刊に「災害に民俗学の視点」というタイトルで**『災害と妖怪 柳田国男と歩く日本の天変地異』（畑中章宏）**が紹介されている。実は長谷川さんからもその切り抜きが送られてきたのだが、柳田が、日本人の心の在り方を探ろうとして民俗学を展開したのだが、実は日本における様々な妖怪の創出は祖先の災害における畏怖でもあった、という視点は目からウロコであった。妖怪の背後にある往時の人々の精神性を思わずにはいられなくなる研究ではないだろうか。

仏像つくり教育の第一歩

篠原 賢明

何も持っていない千手観音を子供たちに見せて、この手に何を持たせたいか、と問うたらどうなるだろうか。という斬新な教育実験が篠原さんから紹介された。子供達は小学校１年生。今年の授業の紹介である。

千手観音は本来たくさんの手（千本というくらいの）を持って衆生を救う仏様である。その千手観音を使って自己紹介をしたらどうなるか、ということで上のような一人一人が書いた作品が紹介された。

この授業の精神性は、先の病観にもつながるのであるが、もしもう一本手があったら…という発想が自分の大切なものを次々とドラえもんのポケットから出すように現れてきて見事だ。

庄司先生の唱える「魂通りの教育論」が子供達の中にすーと入って行っているような仏像達だ。それは日本人の DNA がそうさせるのかもしれないが、学校という空間の中でこのような DNA を揺さぶられると、子供達は俄然お寺や仏像を見る眼が変わるだろう。全面研がめざす宗教教育は、いうまでもなく特定の宗教を指すのではない。それは、日本人の信仰の在り方を自覚的に見つめることなのである。その意味で

小学校１年生からの宗教教育は、沢柳政太郎の説の通り、ここでこれができれば後に続けるという手応えをもてる気がするのである。

もし、庄司先生が思想家の吉本さんと対談したら…

植垣　一彦

思想家の吉本隆明氏が亡くなってから８ヶ月が経とうとしている。大きな書店ではいまだに吉本隆明コーナーがあり、追悼特集の月刊誌や吉本さんの幾つもの著作が並んでいる。吉本さんに深く影響されたという植垣さんが､今回紹介してくれたのは**｢庄司和晃と吉本隆明　～対話の交差点～｣**というレジュメ。

実は庄司さんと吉本さんは三浦つとむを通して３０代前半頃から既知の仲でもあった。またその仕事（研究成果）は、互いに呼応する内容でもあった、という紹介を今回植垣さんが報告してくれた。吉本さんの著作と庄司さんの著作を交互に対比させながらの紹介によって、両者が対象をいかに深く見つめたかが分かってくる。そのいくつかを紹介する。

「私が、今、机の上の緑色の灰皿を眼で見ながら、〈ハイザラ〉という言葉を発したとする。この時灰皿の像を引き起こすことは不可能である。しかしいま、眼を閉じて〈ハイザラ〉といったとすれば、灰皿の像を喚起することができる。（…）像とは何かが、本質的に分からないとしても、それが対象的概念とも対象的知覚ともちがっているという理解さえあれば、言語構造の指示表出と自己表出の交錯した縫目にうみだされることは、了解することができるはずである。」（『言語にとって美とは何か』）

これに呼応する文として庄司さんの『認識の三段階連関理論』が登場する。

「…表象は感覚と概念との中間の相を示し、不明瞭な性格を持ったものである。半抽象的な存在である。したがって、表象の研究は不明瞭な存在を分析するのに役立つ。と同時に、その分析が表象の理論をゆたかにしていくこともできる。」

吉本さんの「対象的知覚」と「対象的概念」とのつながりを実際の思考の中で明らかにしたのが庄司認識論だといえるだろう。庄司さんの論文作りの中で絵を描くという手法は、対象となるものの像を言語という手段をこえて認識することになっている。言語学者は、言語そのものを扱っているのだが、人類の言葉がまだ未成熟なころの我々の思考回路まで思いを馳せないような気がする。その頃の我々は、情念を像としても結び、そこから記号としての言語を編み出したといえるだろう。

かつて、私も比喩の研究で『言語にとって美とは何か』を引用したが、言葉そのものを突き抜けてイメージとしての像を作り上げることで比喩を論じている吉本さんに驚いたことがあった。

このレジュメでもう一つ紹介するとすれば「直感」という認識だ。

「未知なるものに問いかけていく際に、いったい何が動員できるでしょうか。（…）第一に自分の気持ちです。単なる感じであり直感であります。」（『科学的思考とは何か』）

この直感は、柳田国男の著作にもみられれ、吉本隆明にもそれと似たような思考がある。この場合の直感は、単なる思いつきではなく深い試行錯誤の思考の積み重ねの結果として自然に生み出されるものではないだろうか。

特に柳田国男における著作の序文は、一つの仮説の立ち上げだと読むことができ

る。その仮説をどう証明していくか、柳田国男の著作は乱暴にいえば一つの仮説実験だといえないだろうか。

〈詩〉を遊び、表現を愉しむ

谷川俊太郎さんの作品を活用した授業記録・１０選＋α

向井 吉人

詩人の谷川俊太郎さんは、言語の表象的理解を超えて言語をイメージ化できる詩人の第一人者ではないだろうか。周知の通り、向井さんが４０年以上にわたり、教室でのおびただしいことば遊びの実験でなしえたことと、谷川さんの詩は方向としてはっきり重なるような気がする。

冒頭に登場する谷川さんの「かえるのぴょん」がその好例だ。ことばに動きがあり詩を理解するよりも感じてしまう、また同時に創作してしまうという遊び心がこの授業から感じられる。それはまた、言葉を理解することを超えて感じること、さらに思考を飛躍させることまで広く演出させて、教室での子供達の相乗効果を生んでいったことだろう。

向井さんは１９７９年にすでのこの詩で授業を試みたそうだが、最近やっと教科書にこの詩が掲載されたとのこと、なにをか況やという思いがする。

さて１０月６日の例会で向井さんは参加者の我々に以下のような例題を出した。

> 「いちじく」という言葉から思いつくあるいは連想されることばを書いてください。

その分析が早速**「ことば遊びの認識過程を解く」**というレポートになって登場したので紹介したい。

集められたイチジクの連想言語は、「感覚的言語」、「表象的言語」、「概念的言語」の３つに仕分けられました。見ると「概念的言語」が一番多く、少なかったのは「表象的言語」だった。

向井さんは先に植垣レポートに書かれていた吉本さんの**『言語にとって美とは何か』**を使って像について論考する。

「…〈石〉という名詞は、石の概念を意味するとともに、表面の構造の内部では任意の石の像を表現し、また喚びおこすのである。この石の像は、甲という人物にとっては、かつて海岸で遊んだときの浜辺にあった石の像であるかもしれないし、乙という人物にとっては、いまさっき蹴つまずいてころんだ石の像であるかもしれない。」

向井さんはここでイチジクのそれぞれの像が、分類を経て「表象」「感覚」「概念」の認識の上り下りになっていくことに気づく。そして、分類されなかった一割ほどの連想が、ことば遊びに連なる「解体的連想」になると指摘する。認識の上り下りをこえて意味的なことばを解体して、ことばそのものイメージがスライドしていくことをさす。これを読んでことばは、かくも深いのであると感じる。

全面研ホームページの充実を

尾崎 光弘

尾崎さんのセンスみなぎる全面研ホームページが、ついに日の眼を見ることになった。特に「トピックス」や「問い合わせメール」に注目だ。３日に１回の早いペースで更新してくれているので、皆さんも是非毎週１回はチェックをお願いしたい。「問い合わせメール」への投稿も待っています、とのこと。

遠野市主催

柳田国男没後５０年国際フォーラム報告

小田 富英

柳田国男が亡くなったのは１９６２年８月８日。『遠野物語』を生んだ遠野市が内外の柳田研究者を招き「２１世紀における柳田国男」と題してフォーラムが行われた。

会の雰囲気を伝えるためにもセッションⅢに参加した小田さんのレジュメを一部を紹介したい。

「たくさん外国人が日本にきて、日本の研究をするけれど、やり方が間違っている。それは、外国人は四角い言葉で話す日本人にばかり会う。けれども、ほんとうのことは四角い言葉では表現されないのだ。ほんとうのことをいうのは円い言葉を使う日本人なんだ。あなた方は円い言葉を使う日本人にもっと積極的に会わなければいけない。」

これは１９６０年のプリンストン大学のＭ・リーヴィー教授が柳田を訪ねたときの話だそうだが、小田さんのレジュメは、円い言葉を話す人物として、まず井上ひさしをあげ、さらに３．１１につなげていく。３．１１以後、特に福島の人は故郷とは何かという命題を突きつけられた。同じように憤懣やるかたない沖縄では、小学校で方言教育が始まるという。（琉球日報の入社試験では沖縄方言の試験があると聞く。）柳田のいう円い言葉が、２１世紀のキーワードになることを予感する。

◆例会参加報告

前回例会は１０月６日に行われたが、はじめての参加者として**山田（やまだ） 学（まなぶ）**さんと**伊東（いとう） 峻（しゅん）**さんが出席した。山田さんは、青森の今井さんの紹介で全面研を知ったとのことで、２０年来、三浦つとむの研究をおこなってきたほか庄司先生の認識論にも関心がありコトワザを独自に「マンダラコトワザ」として展開するほどの実践家でもある。伊藤さんは、久しぶりに登場した道岡さんの同僚で、道岡さんの話からこの研究会に興味を持ったとのこと。今後の皆さんの活躍を期待したい。

《例会参加者》

庄司、武田、篠原、尾崎、道岡、伊藤、山田、植垣、向井、小田、徳永

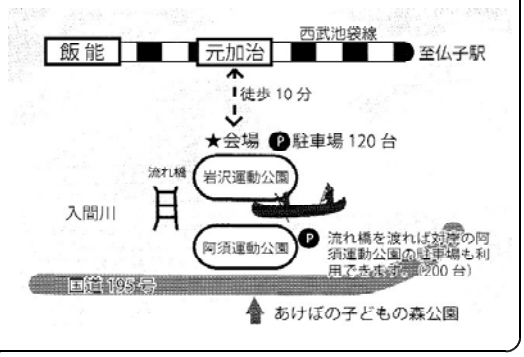
石毛拓郎作品展示販売

飯能ものづくりフェア案内

今や陶工の道をあゆむ石毛さんが西武線沿線のプロの工芸作家らとともに展示即売会を行います。皆さん、ふるってご参加を。

日時：１１月１６日（金）～１８日（日）
午前９時～午後４時

場所：埼玉県飯能市岩沢　岩沢運動公園



【１２月例会のお知らせ】

日時：１２月１日（土）１４：００～
場所：成城学園正門脇大学棟３F研究室
内容：庄司認識論講義
討議 年報は今年で終了するか？
ホームページ近況報告
その他、持ち込み報告

編集責任者：徳永忠雄

復刻 庄司和晃著作

柳田社会科の教科書と仮説実験授業の授業書

教科書とは何かについて、沢柳政太郎はその著『実際的教育学』（明治 42 年 1909）において次のごとく表明している。

「自分は教科書を以て予め印刷して与へたる所の『ノート』と看るを以て適当と思ふ」（沢柳政太郎全集第 1 巻 155 頁）と。

また、こうも言っている。「教科書を以て筆記の代用をなすものである」（156 頁）と。

沢柳の教科書観である。言うなれば、教科書なるものを過度に特別視する思想や殊更に尊重する風潮を打破するために十分なる主張だからである。

この沢柳に一目を置き、また尊敬もしていた柳田国男は、敗戦後まもなく「一つの歴史科教案」（昭和 22 年・1947・原題は「歴史を教える新提案」）を書き、これを発表した。そこに、こうある。

「さて、愈々新らしい歴史教育に取掛かろうとするに当たって、最初に解決しておかなければならぬ実際問題は教科書である。楽をしたがる人にはやや迷惑かもしれぬが、教科書は無い方がよいというのが私の意見である。」（定本柳田国男集第 31 巻 393 頁）

言わば教科書否定論の開陳である。それというのも、従来の歴史教科書は「たとえ大事なことにもせよほんの少しの片端を全体のように思わせ、それも余りに実際から懸け離れたことを、それこそ有無を言わせずに記憶させようとして居た」（394 頁）からである。

更にいえば、教科書に記述に見えるような「こういう事柄さえ覚えて置けば、それで一通り歴史の教育はすんだような、まちがった考えを抱く者を多くし」たからであるし、しかも「子供のうちから授けて置く」べき最も大切なもの、すなわち「このさきまだ無限の新しい知識、殊にめいめい（原本繰り返し符号）」の生活と交渉のある事実が、だんだんと明らかになって来そうだと感じさせ」るような史心を培うことがなかったからである（同上 394 頁）。

だから、「少なくとも他日斯ういふ教科書なら有ってもよいというふことに決するまで今暫くは無しに教へて見てはどうかと思ふ。不吉な予言をするようで相すまぬけれども、長く役に立つ教科書などは、今日はちょっと出来そうにも無いからである。」と結論したのであった（同上 393 頁）。

つまりは、予言論的保留をうちに含んだ教科書否定論の開陳であったわけだ。

そしてここには、柳田における近代学校教育批判が鋭く突出してもいる。要約すると、片端の全体化、実生活と没交渉、固定的な歴史観作り、等々がそれである。一言をもってすれば、史心の養成なし、ということになろうか。…

「史心」というのは「昔の事実を知りたいという念慮、もっと自分々々と関係のある事を、出来るだけ詳しく知りたいと思う向学心」のことである（定本柳田国男集第 24 巻 108 頁）。

（成城学園教育研究所研究年報　第八集／昭和 60 年 11 月）